◎問題

１．　「都会に生きてるセルロイド　やっぱりあなたもセルロイド

　　　　何も知らずに乗せられたのが　不幸の船だと気づいて泣いた　ドール　ドール　」

太田裕美の歌った「ドール」の歌詞にあるように、ともすると、私もあなたも、命のないただの人形に陥ったままでありがちではないか？

**◎前回読んだロダンの言葉（内藤訳）：**

**２．　ギリシャの彫刻では、生命がはつらつとした筋肉を生かしてもいるし、またそれに、温かみをもたせてもいるが、しかし、官学派の芸術は、それとは反対に、いつ壊れるかわからない人形も同じで、まるっきりいのちがなくて、まるで氷のようです。［直訳すると、「人形は死によって氷っているかのよう」］**

**◎ニーチェの「仏教」に関する言葉**『愉しい知識』（神保光太郎訳、創元社）から

３．　仏陀も同じやりかたで、この種の人間を見つけ出した。…

**善良で温和で（何を措いても、逆うことをせず）あるが、これは無精のためであり、同じように、無精から、禁欲化し、殆んど無欲の生きかたをしていた**のである。

すなわち、**こうした人間は、是が非でも、その全くの惰性（vis inertiae）のままで、現世の苦労（すなわち、労働や仕事一般）が繰り返されるのを防止すると約束するような信仰へと転がりこまねばならない**ことを彼は理解した。――これを「理解したこと」が彼の**天才**であった。

**◎ロダンの言葉　『ロダンに聞く』内藤訳。**

４．（インタビュアーのグセル）こちらに伺って、いつも驚いていることがあります。拝見していると、先生はほかの彫刻家とはまるきりちがった行き方をしていらっしゃいます。私は彫刻家にたくさん知合いがあって、その仕事ぶりを見てきたものですが、その人たちは、テーブルと人が言っている台座の上にモデルをのぼらせて、あれこれとポーズするように言いつけるのです。のみならず大抵いつも、自分の好みにまかせて、胸や脚を折らせたり伸ばさせたりするのです。ぎくしゃくと動くマネキンとまるきり同じですが、彫刻家たちは、そうしたあとで仕事にかかるのです。

５． 　ところで、先生はそれとは反対に、モデルたちがこちらの気に入った姿勢をとるのを待って、それを再現しようとなさいます。したがって、モデルたちが先生に命令されているのではなくて、むしろ先生が、モデルたちに命令されていらっしゃるようです。

６． 　小さな彫像を濡れた布ぎれで包んでいたロダンは、物すずかに私に答えた。

（ロダン）**わたしは、モデルたちに命令されているんじゃない。「自然」に命令されているんです**。

【Mais, en violentant ainsi la Nature, et en traitant des créatures humaines **comme des poupées**, ils risquent de produire des **œuvres artificielles et mortes**. 】（直訳：人工的で死んだ作品）

７．　君のいうその彫刻家たちが、君が今いったような仕事をするのには、もちろんそれ相当な理由があるでしょう。**しかし、そんなふうに「自然」をけがし、人間を人形扱いにしたら、細工だらけな、いのちのない作をする恐れがありますね**。

８．　わたしは真実を追いもとめている。生命を待ち伏せている。だから、そういう彫刻家たちをまねることはつつしむんです。この目で見る人体の動きの生きいきしたところをつかむんだが、しかし、何もこのわたしが、それを押しつけるわけではない。

９．　取りあつかう主題の性質上、モデルから或る一定の姿勢を求めなければならぬ時だっても、わたしはモデルにその指示はするが、モデルに手を触れてこんなポーズを取れというようなことは、深く注意して避けます。なぜというに、現実がしぜんに見せてくれる姿かたちだけを作にしたいからです。

【En tout j’obéis à la Nature et jamais je ne prétends lui commander. **Ma seule ambition est de lui être servilement fidèle**. 】

10． どんな場合にも、私は「自然」に服従します。決して命令しようとは思いません。**わたしの唯一の野心は、「自然」にたいして奴隷のように忠実であることです**。

●古川訳

6’．　彼等の命令ではなくして、私は自然の命令に従っているのです。

　私の仲間達も勿論、貴方が今いわれたように、仕事をする上での彼等の理由を持ってはおります。**然しそのようにして自然を矯（た）め、人間ともあろう者をまるで人形のように取扱いつつ、彼等は同時に不自然に技巧的な、生命のない作品を作るの危険を犯しているのです**。

　私の場合、真理の猟人であり生命の番人である私は、彼等のお手本を模倣することを自戒しているのです。私は自分の観察する動き（ムーヴマン）を真に迫って捕えます。しかしそれらの動きを課するのは私ではないのです。

　私の取扱う主題によっては、モデルに決定的な姿勢をとらせるより致し方のないような時でも、私はそれを指定はいたしますが、然し彼をポーズにつけるために手をふれるようなことは、心して避けているのです。何故なら私は現実が自発的に与えてくれるものをのみ表現したいと思うからです。

　万事につけて私は自然にしたがいます。そして自然に命令しようなどとは決して思いません。**私の唯一の野心とは、何処までも彼に忠実であることなのです**。

◎「瞑想」に関する箇所

11. （グセル）ある日曜日の朝、ロダンといっしょにそのアトリエにいた私は、彼のもっとも目ぼしい作の一つの模型の前に立ちどまった。

　それは美しい若い女で、胴体をいたいたしくねじらせている。何か得体のわからぬ苦しみに悩まされているように見える。頭は深く垂れている。唇と瞼が閉じていて、眠っていると人に思われぬとも限らない。しかし、悩ましそうな顔をみると、劇的に心を張りつめていることがわかる。

12.　見るにつれて、いよいよ驚くことは、女が腕も足も持っていないことである。彫刻した人は、自分で自分が不満なあまりに、どうやら手足を打ちこわしたようにみえる。それでも人は、こんなに力づよい彫像が、完成されていないことを残り惜しく思わぬわけには行かぬ。残酷にも手足を切りとられていることが、いたいたしいのである。

13.　アトリエの主人の前で、私がおもわず、こんなふうに心の中をぶちまけると、主人はどこか驚いたような様子をしていった。

14.（ロダン）何がいけないんです？　この像は、わざとこうしたんで、これ以上どうするつもりもない。いや、まったくです。

【Elle représente la **Méditation**. Voilà pourquoi elle n’a ni bras pour agir, ni jambes pour marcher. N’avez-vous point noté, en effet, que la réflexion, quand elle est poussée très loin, suggère des arguments si plausibles pour les déterminations les plus opposées qu’elle conseille l’inertie ?】inertie:慣性、惰性、不活発。

15. **「瞑想」**というところですよ。だから、**何かをする腕も持っていないし、歩くための足も持っていない**のです。

16. 思索というものは、それが極端になると、まったく反対の決定をするために、いかにも尤もらしい議論の拠りどころを思いつかせて、**ついには人を無気力（**inertie）**にしてしまう**。どうです、君はこんなことに気づいたことはありませんかね。

17. （グセルは、ロダンの言葉を聞いて、次のように思い直す。）

問題の女は、実現することのできない理想につきまとわれ、つきとめることのできない「無限」になやまされて、解決できないさまざまな難問題に一も二もなく唆（そその）かされている**人間知性の象徴だった**。

18. 引き釣っている胴体には、責めさいなまれている心の中と、解答をあたえることはできないながらも、いろいろな問題を掘り下げて行く執拗（しつよう）さ、**花々しくはあっても結局は無益な執拗さ**がはっきり窺われた。

19. そしてまた、手足が断ち切られているところには、**瞑想を事とする人が、実際生活にたいして感ずる打ち勝ちがたい嫌悪の情が示されていた**。

My figure represents Meditation. That’s why it has neither arms to act nor legs to walk. Haven’t you noticed that reflection, when persisted in, suggests so many plausible arguments for opposite decisions that it ends in inertia?

●別の箇所：グセルが「考える人」に関してロダンに語った言葉（ロダンも納得）。

【**Dans votre Penseur, la méditation, qui veut en vain embrasser l’absolu, contracte, sous son terrible effort, un corps athlétique, le ploie, le met en boule, l’écrase**.

20. 「考える人」では、いくら絶対を抱擁しようと思っても、**どうにもならない「瞑想」が**、おそろしい努力をしながら、屈強な**肉体を縮ませては押しまげ、球のようにまるめては押しつぶしています**。

20’. （古川訳）**『考える人』に於いては、空しくも絶対を抱擁せんと願う瞑想が、その恐ろしい努力の下に力士の肉体を縮ませ、それを撓（たわ）め、それを丸めて粉砕しております**。

（Fedden訳）**In your Penseur, meditation, in its terrible effort to embrace the absolute, contracts the athletic body, bends it, crushes it**.

◎「死によって氷った人形」が生きた人間になるために？（ロダンの言葉）

**21. 古代芸術は生命そのものです。古代芸術よりもよく生きているものはありません**。

22. 私の考えでは、ギリシアが**われわれの師**です。彼らのように彫刻を作り得た者はかつてない。彼らはその**彫刻の脈管の中に血を溢れさせる事を知っていた**。

23. 古代彫刻の作った魂は私の陳列箱の中で**われわれ自身のよりも活きている！**

24. **古代彫刻！　私は自分が彼に対して持つこの永遠の愛に生きねばならない事を感ずる。**

（遺言から）

25. 　君たちに先だった大家たちを、神の前にあるのと同じ心で愛してほしい。

　 フィディアスとミケランジェロの前に頭をたれてもらいたい。

◎ヴィンケルマンの言葉

『古代芸術模倣論』から

26. **あの像がなければ決して自然の中にも見出せなかったに違いない美**の自然の中に存することを彼に教えたのはかの《ヴェヌス》だったのである。そこで**希臘彫刻の美は自然の中の美よりも先に見出さるべき**ものであり、また彫刻の美は自然の美のように散らばっておらず、一に統一せられていて**人を動かす力が一層強い**のだということになりはしないだろうか。

27. **自然模倣よりも古代模倣の方が勝っていることを最も明瞭に示す為に**は…。

28. 作家は己の芸術に**霊感を与えられ**、神々からプロメテウスの奪った**火は彼の裡に燃上るであろう**。

『古代美術史』から：

29. この美術の奇跡を見るとき、私はすべてを忘れ、ただ尊敬をもって対せんと、みずからを高きに移そうと努める。

**胸は崇敬の念に膨らみ**、あたかも予言の霊を吹き込まれて高きに昇らされ、デロスあるいはリュキアの聖なる森の、アポロの在（いま）す処へ連れ去られたかの如くに震える。何となれば、**私の心は、あたかもピュグマリオンの佳人の如く、いま生命を得、動きを得たかに感じる**からだ。この私の心をどのように形象し、どのように記述することができるのか。

◎西田幾多郎が引用するロダンの言葉

●「心の内と外」（11巻95頁）

30. 絶対に自己を捨てると、そこに絶対の活動が現われて来る。これは矛盾した事のようであるが事実である、概念的に矛盾と考えて居るが事実の上には真である。そういう宗教的生活が一層深い意味の宗教的生活であろう。

　此の如き生活が絶対愛の宗教生活である。絶対に自己を捨てた所に現わるる絶対の活動が愛である。そういう意味で罪が宗教上神聖である、罪の裏には非常に神聖なものがある。ロダンの話を集めた『芸術』という書の中に**醜なれば愈々美である**が宗教にも此の如き意味がある。

●（２巻330頁）

31. 立場の混淆（こんこう）は知識に対して誤謬であるかも知らぬが、感情に於ては真である。**誤謬は深い人間性を現わす、ロダンがplus un être est laid dans la nature, plus il est beau dans l'artと云うのもこの点にあるでのある**。すべて一つの立場に於て矛盾に陥るものも、高次的立場に於ては、可能的内容となることもできる。

※「**自然の中で醜いものほど、芸術の中で美しい**」（高村光太郎訳）

●（14巻132頁）

32. 実在そのものの内より色々の分化発展をすること、実在の中に矛盾を生ずる事は実在の発展に欠くべからざるものである。**矛盾が実在の本質である**。悪はファウストの中にメフィストフェレスが「常に悪を欲し又常に善をなすかの力の一部」と云っている如く、悪は見方によって悪ではない。本来は悪はない。悪は一面だけを見ている所にある。それだから全体より見れば悪というものはないということもできる。悪は抽象的な見方の上（即ち主観的な見方）にあるので、全体より見れば悪というものはないというスピノザなどの見方ともなる。美に対しても、かかる考を起すことが出来る。

**ロダンは「芸術」l'Artの中に美は真理である、真理をあらわす運動である、本来美醜はない、物の真をあらわせば美である、醜なれば愈々美であると云っている。美と宗教的なるものとはかかる点に於て一致する**。

●（12巻78頁）

33. **ロダンなどはこの点から見て哲学上ニイチェの思想と相通ずる所が多い**。ロダンは力を表わそうとする人であるが力という考を生物学的に解すればニイチェなどの思想に接近して来るように思う。

◎『ギリシアの神話　神々の時代』カール・ケレーニイ著（植田兼義訳）

34. 　**ピュグマリオンはキュプロス島の王で、アプロディテの恋人**とみなされていた。…

　語り伝えられるところでは、ピュグマリオン王は、象牙でつくられたアプロディテの裸体の立像に惚れこんでしまった、という。このような奉献神像は、古代の非ギリシア系の人々のあいだではとりたてて変わったことではなかった。彼はその像を妻にして、自分のベッドに連れて行こうとした。もちろん、これだけではまだ物語の全貌を伝えていない。

　また、こうも伝えられている。**ピュグマリオンはみずから象牙で美しい女性像を刻み、それにすっかり惚れこんでしまったという**。彼**が恋い焦れてアプロディテに祈りをささげると、女神は彼を憐れんで、像は生き身の女体に変わった**。ピュグマリオンは彼女を妻にした。彼女は彼とのあいだにパポスを生んだ。パポスの息子キニュラスが、アプロディテ神殿のあるパポスの町を建設した。

　この物語によれば、愛の大女神アプロディテ崇拝は、キュプロス島ではピュグマリオンと彼の裸体の象牙像の創作とともに始まったといえよう。ピュグマリオンについては、キュプロス島の人々は、彼はアプロディテの主人で、恋人であるアドニスと同じものであるとみなしていた。